

2173再構築6

強制力と世論と

自由と最適化

エリー

あなたは「お腹がすいたので、何か食べたい」と思いました。

手元にはお金があります。食糧を買って調理することも、外食することもできます。何を食べるか決めることができます。誰かに命令されることはありません。

体が受け付けないものを食べなくてもいいし、嫌いな味がするものも食べなくていいです。何の不自由もありません。自由です。

-

しかし、小学生だったらどうでしょう？

学校がある日の昼は、給食を食べることが求められるでしょう。

給食が好きで、食べられないものもなければ、安くて、栄養バランスのとれた食事が提供されることはよいことであり、否定する必要がありません。不自由ですが、自由を望んではいません。

-

ところが、アレルギーがあって、食べたら死んでしまうなら？

「アレルギーが起きるものを食べなくてもいい配慮」を求めましょう。どうしても認められなければならないから、必死に訴える。

「仕方ないので食べます」と言えない以上、対応してくれないなら、弁当を持っていくとか、休むとか、自己防衛をするでしょう。

強制されていて自由ではないから、強制している人間に対して、強制されている側が、意見を主張する。強制している以上、「聞くこと」が求められる。

自分は大丈夫でも、食べたら死んでしまう人にどう対処するか、について意見が出てくることもあるでしょう。

なぜなら、対処することで、手間がかかって費用がかかるとか、メニューが減るなどの影響を受けるなら、他人事ではなくなるからです。

-

自由に選ぶことができ、影響を与えることがないなら、説得する相手はいません。

「わたしはラーメンが食べたいのだ！」と言われたら、「食べればいいじゃん！」で終わりです。他人事です。

この話は、自分語りとネタ探しという話につながりますが、それは後で。

-

太り過ぎを心配した家族がいるなら、「やめなさい」と言うかもしれませんが、強制することは難しいでしょう。

家長の言うことは絶対という世界なら、自由ではないので、やめさせることができるかもしれません。

我が家のルールに対して、反論して主張を認めさせるとか、折り合いがつかずに決別するとか、嘘をついて隠れて食べるとか、さまざまな対応が生まれるでしょう。

-
集団で動く時は、効率やコストを考えて、最善の方法が選ばれます。そのルールで困る人は、訴えて対応を求めます。

「アレルギーで死ぬかもしれない」は、少数でも命にかかわる問題なので、「放置できない」と認めてもらいやすいでしょう。自分は大丈夫でも、他人事として切り捨てずに応じる人が多いだろう。

では、「にんじんの味が嫌いだ」という好みの問題なら？

世論としては、「好き嫌いはよくない」と対応せずに、子どもに「食べられるようになること」を求めるのが一般的ではないでしょうか。

-
もし、余裕があるなら、ホテルのように、「その人だけ別の食材を使う」という対応をしてももらえるだろう。

しかし、提供する側の負担になる以上、すべてで通用するやり方ではない。ある程度、高い店でしか通用しないでしょう。

-
不可能が可能になったら、少数意見に個別に対応する余裕が生まれて、多様性が実現されます。

しかし、労働力やコストなどの問題が発生して、可能が不可能になったら、今まで許されていたことができなくなります。原理・原則を主張して、画一的な対処を求める動きが生まれるだろう。

-
個別に対応して多様性を生み出すためには、決定する自由が求められます。強制されていたらできません。

だから、作る人が決める権限を持たない公的機関である給食ではできないが、権限を持っている民間のホテルでは対応できます。

自由に決めることができるから、工夫して、不可能を可能にできます。

強制されている状態で、最適化を行う場合、悪くなった状態に対応するために少数者を切り捨てるだけなら、工夫はいらない。非情さがあればいい。

しかし、原理・原則を定めた上で、その時、その場に対応していくためには、やっぱり知恵が必要になる。

強制力が働いている時、強制している立場の人にその「知恵」があれば、一気に解消することができる。しかし、なければ、「切り捨て」が選ばれてしまうだろう。

絶対的な権力を認めないことを選んだのは、切り捨てが行われるケースが圧倒的に多いから。知恵は簡単には得られない。

だから、いろんな人が、それぞれ自分が正しいと思う方法を試して、成功したケースを広める、という競争原理を導入した。

しかし、それでもやっぱり、知恵が簡単に出るわけではないし、今度は逆に「実現性の高い方法を思いついても、強制力がないから、浸透させることができない」という問題が起きてしまう。

「2173年シリーズ」の中で、価値観を共有して原理・原則を守る保護区と、競争原理を導入して工夫して新しいことをする自由区にわけた。

集団で動く保護区では、競争原理が働く。不自由だが、自由を望んでないから、受け入れられている状態。

個人として動く自由区では、自由なかわりに、みんなで助け合いましょう的な福祉がない。なぜなら、義務を果たさない代わりに自由を許したのだから、弱者を支援する存在がない。対等を前提にしているため、「世話をする・される」という関係が起こらない。

この制度を支えるための中心は保護区にあるが、工夫して、問題を解決していく原動力は自由区にある。

占い師らしいたとえを入れるなら、保護区は月であり、自由区は太陽。

太陽は、目的を持ち、不可能を可能にするために工夫する。最短距離で劇的に変化する。

月が太陽の光を反射して輝くように、保護区は自由区の資金援助と技術提供によってゆっくり変化していく。

月である保護区は、自然という強大な力に服従する、混沌と全体性の世界。受け入れ、耐えていく。

太陽である自由区は、文明で自然に対抗する、改革と個性の世界。行動し、変えていく。

後にまわした、自分語りとネタについて、最後に書いて終わりにしよう。

強制力が働かないために、自分のことを自分で決められる自由がある世界では、黙ってやればいい。意見を主張する必要がない。

しかし、「好きにしていよ」といわれて、何の迷いもなく行動できる人は少ない。「これがしたいのだろうか？」「これでよかったのだろうか？」という迷いが生まれる。そうすると、自分がしたことを話して感想を聞きたいと思ったり、人の様子を知りたいと思ったりする。

強制力が働いている世界では、大前提となる理屈に対して、みんながそれぞれに立場を表明するから、体系的な理論としてまとめることができる。同じ根を持つ一本の大木として育つ。世論が形成される。

しかし、自由な世界では、前提を選ぶことができるので、一つの理論としてまとめることが難しい。違う根を持つ無数の雑木林が生まれる。自分を語って、共感を得ることで、意義を感じられても、全体に共通する世論にまで発展することはない。成功例や珍しい例をネタとして見聞きしても、前提を共有して同じ世界で話すわけではない。外側から眺めているだけ。「自分語り」と「ネタ」があるだけで、共有できる指針となるような「世論」は生まれづらい。

保護区は、一つの価値観を共有しているので、世論が生まれるだろう。巨大な一本の木になる

。

自由区は、異なる価値観を認めているが、「保護区を支援したものに権利を与える」というルールが強要されるので、竹林のような根はつながっているが、幹は分かれている、という論理体系が生まれるだろう。

それぞれ、「それがなにか？」は、まだ明確に言葉で語れない。理論を詰めるのは苦手。でも避けては通れない。だから、「何を考えるべきなのか？」を明確にするために、このメモを書いた。

冒頭は他人への語りかけだからですます調で、途中から自分の頭の中を整理しているから言い切りだけど、メモだから統一しないままにします。